

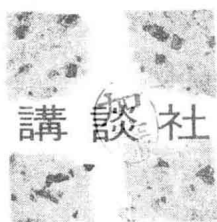
神
幸
祭

祭 幸 神

加 藤 周 一

講 談 社

神 幸 祭



昭和34年3月25日 第1刷発行

著 者 か とう しゅう いち
 加 藤 周 一

東京都文京区音羽町 3-19

¥ 280 発 行 者 野 間 省 一

印 刷 所 株式会社 文 弘 社

発行所 東京都文京区 株式会社 講 談 社
 音羽町 3-19

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。 (大進堂製本)

© Shūichi Katō 1959. PRINTED IN JAPAN

神

幸

祭

神幸祭は九州田川の祭である。しかしこの小説の舞台は、
実在の特定の場所とは関係がない。神幸祭の名を借りたの
は、その響きがよいからである。その行事の記述も必ずしも
実際のそれとは一致しない。また登場人物はすべて実在のい
かなる特定の人物とも関係がない。

第一章

石炭がらを敷きつめた道が白く輝き、炭住街の棟割長屋が静まりかえつて、子供の泣き声も聞えない真昼間、埃っぽい空気と眼のくらむ白い光のなかを、矢野仙次は軽く跛をひき、小刻みに肩を上下させながら、歩いていた。影はどこにもなかった。長屋はボタ山の裾に延び、そこには一本の大きな樹もなく、夏には雑草が茂る。

矢野仙次は二番方で、十一時に上つてから寝ていなかったのだ。それで眼まいがし、汗がむやみに流れた。しかし早く歩きさえすれば、眼まいの方が消えてなくなると考えるほど若かった。子供のときに患った軽い癲癇は、何の妨げにもならない。矢野はまつすぐに、共同水道の傾いたトタン屋根の方へ近づいていった。

するとその角を曲つて、突然、眼のまえの道へ、小さな子供の手を引張つた女が、矢野とすれちがう向きに出てきたのだ。あまりに不意で、立止ろうとしたときには、矢野はもう二・三步先へふみ出していて、女と子供はすれちがつていた。振りかえつてみると、それが事故で死んだばかりの先山・松尾の女房つるであつた。

しかし松尾つるは彼の方を振り向かなかつた。何やら急ぐ風で、長屋と長屋の間の白い道を、影のように子供の手を引張つてゆく。確かに矢野のいたことにも、気がつかなくつたらしい。両側の社宅の低い軒は静まりかえつてゐる。死んだような真昼、眼にみえない埃が光つてゐる空氣のなかを、松尾つるの影は、どんどん小さくなる。立ち止つて振返つたまま、矢野は眼まいを感じ、悪い方の足を踏張つた。

松尾つるはどうかしている。おれに気がつかないとは妙じやないか。

しかしそのとき、矢野自身もどうかしていたのだ。突然背後で声が出た。

——何ごつしよるとかね？

広井喜三郎が事務長の津田とならんで、矢野の顔を覗きこんでいた。

——何ばしよるか、今頃こげな処で？

しかし矢野の答は待たず、主婦会から註文が出ているから、今共同水道の様子を見に来たところだと広井はいつた。そこは両側の十軒長屋の端になつていて、二十世帯が毎日そこで水を汲む。

矢野自身は独身寮だから使わないが、故障のある度に問題になつていたところである。

——組合に行きよるとか？

それは図星にちがひなかつた。矢野は二番方をすませて上つて、休まずに、組合の寄合

へ行くところであつた。それまであまり寄合へ出たことはないが、今度は話が先山の事故のことだから、普段とはちがうのである。矢野を一人前の坑夫にしたのは、松尾熊吉だし、その松尾が死んだのだ。しかしそれにしても広井喜三郎は、何と勘のいい、素早いやつだろう、会社の他の連中とちがつて、この小男だけは全く苦手だと、矢野は考えた。

——水道も水道ばつてん、松尾熊吉の銭のことですたい。

広井はまるでそれを聞かなかつたように相手にもしない。矢野は汗が足まで流れるのを感じた。

背の高い事務長はそのときまで黙つていた。しかし突然妙に冷たい、落着いた声でいつた。

——運のわるいときに事故がおこつたものだな。

面と向つて矢野仙次が津田潤作の言葉をきいたのは、それが最初である。津田は矢野の顔をみながら、矢野にはなく、広井にそういつたらしい。打てば響くように、広井は俄に表情を変えて、津田の方を向いたが、津田は広井に見向きもしなかつた。この地方の抑揚でないその言葉の調子には、実は広井ではなく、その場にいない誰かに向つて、呟くような響きがあつた。

「運のわるいときに」、——突嗟にその脈絡をつかめなかつた矢野は、すぐにそれが会社に

とつて運のわるいときだろうということを、理解した。彼は津田の方に向きなやつていた。

——死んだ者にしてみりや運の良かも悪かもなかない、と矢野は叩きつけるようにいつた。

すると津田は、その言葉にはじかれるように、あらためて正面から矢野の顔をじつとみた。その広い額には静脈がうねり、汗が光り、眼鏡の奥に鋭い射すような眼があつた。その眼を逸らさずに全身の力をこめてにらみ返しながら、汗と埃にまみれた矢野は、苦手の広井ではなく、この背の高い男を憎んでいる自分を、はつきりと感じた。一体なぜか。理由はなけれども、この男が憎む理由をあたえないということが、すでにこの男を憎むのには充分な理由であつたように思われる。一瞬間がすぎ、津田潤作は一言もいわず、折目のついたズボンの埃を片手で払いおとすと、何か言いたそうな広井喜三郎を促して、そのまま立去つていつた。

組合の寄合いは、正面に「勤儉力行」と書いた途方もなく大きな額のかかつている集会所にあつた。額の下に低い演壇があり、演壇のまえに十五六人が集つて、畳の上にあぐらをかいている。黄ばんで縁のすり切れた畳は年に二度浪曲大会をやりとすし詰めの人でみえないが、こうして片すみに小人数が寄合つているときには、無意味に広くみえる。矢野仙次が入つていつたとき、その小人数は議論に熱中してふり向きもしなかつた。立て膝をしながら喋

つてゐる鈴木健二郎の高い声が広い部屋に響いていた。

——……だから補償金をきりはなすことはないぞ。保安条件を勝ちとることが……

松尾熊吉は死んでしまつた、と矢野は皆の方へゆつくり近よりながらも一度思つた。窓は開いていたが、熱気のなかで畳は蒸れていた。選炭機の単調な音が、時計の音のように正確に一定の間をおいてひびいて来る。夜昼絶えまないこの音だけは、松尾熊吉がいなくなつても、おそらく矢野自身がいなくなつても決してやむことはないだろう。このヤマは矢野がいなくなつても少しも変らない。命がけで揺さぶつても動かない。選炭機の音はたとえ一分でも休むわけではないだろう。死んでも生きてても、おれたちは、それほど小さな、それほど無意味な存在なのだろうか、と、矢野は思つた。途中から仲間に入つて、鈴木喋つてゐる話のすじはよくわからなかつた。

矢野が組合の寄合いに熱心になれなかつたのには、弟がいて、おふくろがいても、坑内直接夫だからやつてゆけるが、組合専従になると、収入の減るということもあつた。しかしそれだけではなく、委員長の鈴木の話に、とかく腑におちないところがあつたからだ。学校出の鈴木の話はとにかくむずかしかつた。町の農業学校を出てから、この山でつぶれた組合をつくりあげたが、戻れたのは、親分鈴木の子だつたからで、その甲高い声にはどこかに上から押しつけて来るような調子がある。矢野は誰からでも押しつけられることがきらいだつ

た。また委員長としての鈴木がというよりも、組合がその調子の鈴木を先頭にしてどこまで押してゆけるかということにも疑問がないわけではなかった。鈴木は町から戻つて、しばらく坑内へ降りていたが、まもなく委員長になつた後、最近ではるくに坑内を知らない。ササ部屋では、もう鈴木健二郎という名を口にする者はほとんどなくなつていた。どうして誰も口にしないのか、矢野にはわかりすぎるほどわかつていたのである。やつは組合をつくつた男だが、おれたちの仲間じゃないという感じは、矢野だけのものではなかった。

しかしその日の鈴木の良い分はもつともだつた。しばらくきいているうちに、そのすじみちが矢野にものみこめてきたのである。松尾熊吉は事故で死んだ。不注意ではなくて、保安の条件が悪かつたからである。会社はなぜ景氣のよかつたときにもうけた金で保安の改善をしておかなかつたか。それをしなかつたのは会社の責任である。松尾の事故の補償金を出しても、それが松尾の借金と棒引きでは出さないと同じことだ。家族はどうするのだ？ 松尾つると小さい子供は？ 死んだ人間が、殺した責任者に、借りた金を返さねばならぬという理くつはない。借金の棒引きは当然である。補償金は借金とは別に払うべきものだ、——そこまでは、矢野仙次がもつともだと思ふことを鈴木がいつたのである。

しかしその日の鈴木はもつと先まで進んだ。借金棒引きの上で補償金の要求は、松尾を殺した責任の追求とむすびつかなければならぬ。いつ死ぬかわからぬ条件ではわれわれも働け

ない。保安の全面的な改善が急務である。また夏の坑内温度がこれだけ上る以上、休養がどうしても必要であり、休養しなければ事故も起り易い、充分に休養してやつて行けるだけの夏期手当を要求しよう。松尾が借金をつくつたのは、会社がつくらせからだ、この機会にその点をはつきりさせ、保安の改善と夏期手当の同時実現に起ち上ろう……

津田と広井喜三郎に出会つたとき、矢野はいいことを思う存分にいうことができなかった。それを鈴木が自由自在にいいまくつていてという感じもあつたが、一方では、もしこういう要求が通つたら少し話がうますぎるだろうという氣もした。しかし矢野は津田を憎んでいた。憎んでいたが、口を開いたときには、結局話を松尾つるの問題へ引戻そうという点を強調していたのである。

——錢ばかりじゃなかばい。社宅から追いだされちや^{おおごと}大事ばい。

松尾の死んだ後で、家族の住居の問題は、さしあたつて出ていなかったが、おそかれ早かれ出て来るにちがひなかつた。松尾つるの場合に社宅からの立退が何を意味するかは、矢野の説明をまつまでもなく、誰もが知つていた。

一座がざわめき、皆の視線が俄かに自分に集るのを矢野は感じた。

——松尾つるを見殺しにはさせられんぞ、と矢野はいつた。

鈴木健二郎はすぐに賛成した。

そのとき組合専従の横田周吾が、鈴木賛成の後をひきとるように、補償金と社宅の件はいそぐ必要があるだろうと附足した。横田は考え深かそうに静かな声で説明した。

——他の問題は後まわにしてもよかばつてんな。

鈴木は、後まわしにはできない、他の問題も実は一つの問題であると主張した。議論がはじまつた。

横田は、松尾の家族のことでは話をはやくきめなければならないという点を、固執していた。

——そげん要求を一ぺんに出したつちや、会社がうんといわんじやつたら、どげんするな？ 話合いがもつるうち、なごう待たんならんばい。

——そんなときはストライキするたい、と鈴木は応じた。

——そげんな風にやいかんばい。

——なしいかんな？ といつて、鈴木は皆の方へ向きなおつた、今ばい、夏期手当をとるなら、今しかなかばい。保安の全面的改善も要求せにやならん。今出さんでにおいて、いつ出すかな？

鈴木が喋りだすと、横田は鈴木に喋らせながら、話の途切れるのを待ち、途切れるとすかさず、ストライキをして戦うというが、組合にはどれだけの期間戦う資金の用意があるの

か、と質問した。そこまで考えていなかった矢野仙次は、横田の質問におどろき、あらためて鈴木と横田周吾のそれよりずっと老けてみえる顔を見くらべた。ストライキにもちこめば、たとえもちこめたとしても、長くなるだろうと横田はいうのである。

——長くもたんとは会社の方たい。

——会社の話はしらん。組合の方はどうな？ 何日やれるつもりでおるな？

——それが敗北主義的な考えちゆうもんたい。

——そげなこつばいいよるとじやなか。組合の実力ば養うことが先決だちいうよるとた
い。

組合は戦いを通じてしか実力を養えない、と鈴木がいい、それどころか、ストライキをつぶされれば、組合の組織が危い、と横田はいつた。そのうちに鈴木はたち上つていた。

——ストライキば打つなかで組織が強くなつてゆく。意識がたかまつて来るとぞ。三池の
例ばみても、……

——三池の話じやなかぞ、とそのとき誰かが半畳を入れた。

鈴木以外の者は畳に坐つたままである。

——親分はどげんするとかね？ と横田も、あぐらのままでいつた。

誰でも感じているが、誰も敢ていわなかつたことが、遂に言葉となつて、眼のまえに出て

来たのである。

もし親分が入坑しろといえ、一番方の大部分が入坑するにちがいない。そのとき組合の決定に、二番・三番方のどれだけが従うか。たとえ一日だけのストライキにしてもそうであるとするれば、解決が長びいたときには、一体どういうことになるだろうか。鈴木親分は所長や広井喜三郎に通じている。その親分の息子が組合で煽っている。……

——親子げんかじやどうにもならんたい、とさつきの半疊を入れた男がいつた。

鈴木健二郎は憤然としてその男の方を振りむいたが、そのまま手は出さなかつた。

坐つてしていると汗がねばりつくのに矢野仙次は閉口していた。外では汗が流れる。部屋では浸み出してきた汗が、そのまま流れない。選炭機は相変らず無愛想で、規則的な音をたてている。寝ていないから、こんなことが気になるのだと矢野は思う。松尾つるとひきずられるようにして行つた子供はどうしたか。なぜすれちがつても気がつかなかつたのだろうか？ 声をかけなかつたこつちも、どうかしていたのだ。津田潤作と広井喜三郎、——「悪いときに死んだ」といいやがつた津田のまえから、このままひき下つてたまるものか。

しかしこのままひき下らずに、要求をたたきつけようと主張している鈴木健二郎にも、頼りないところがあつた。

会社はもうけている。炭は手で掘るのだ。賃銀などは、炭の値にくらべれば、いくらあげ

ても安いものだ。景気がよければ、もうける、不景気になれば、首を切つて、損をしない。労働者がだまつてみているのは、「意識が低い」からだ……

たとえそうであるとしても、どうすれば「意識が低」くなくなるのか、と横田周吾がひとりで食ひ下つていた。矢野は、横田の疑問を疑問としないわけにゆかない。しかし津田潤作のまえから黙つて引退る気には、なおさらなれない。松尾熊吉は死に、ある日突然粉々になつて吹飛んでしまつた。それが、都合のわるい時に死んだ、なんてことでたまるものか、と矢野は何度も心の中で繰返していた。

松尾熊吉の事故に矢野は居合せなかつた。炭車の鋼索がはずれて、一瞬の轟音と共に斜坑をまつしぐらに下つていつたのである。脱線し、岩壁に激突し、跳返り、粉微塵となり、岩にかこまれたそのせまい空間のなかに、その一秒まえまで生きていた総てのものを吹きとばしてしまつた。そこで人車を待つていたのが、松尾熊吉なのだ。毎日毎夜何千回も人車は下つて来て、しずかにそことまり、松尾熊吉は乗りこみ、安全燈を股の間において硬い木板に腰をおろすと、鉄の車輪が軌道に軋りはじめた。疲れて口も利かず、じつと坐つたまま暗い坑道を上つてゆく。そのうちに一条の光、斜坑の口の遠い空がみえて来る。それから股の間の安全燈を片手で取上げ、ゆつくり腰を浮かせる。……その人車は、何千回も、しずかに